

---

## フィリピン国台風ハイヤン被災地での国際緊急援助隊医療チームの活動報告ー平時の準備 がもたらした成果に焦点をあててー

(中村明ほか、日本集団災害医学会誌 20: 184-193、2015)

2016年6月10日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

### 【要旨】

2013年11月3日にミクロネシア付近で発生した台風ハイヤンによって甚大な被害の発生したフィリピンには、国際社会から多数の支援チームが現地入りした。日本からも3次にわたる国際緊急援助隊医療チーム(Japan Disaster Relief Medical Team : JDRMT)を最大被災地であるタクロバンに派遣し、約1か月にわたる支援活動を通じて合計3297人の被災者の診療を行った。今回の現場では、国際社会との連携、広域な被災地の支援のための巡回型診療(モバイル診療)の実施などの面で特徴があった。今回の現場での活動により、改めて平時からの国際機関や他国との関係の構築、研修・訓練、各種課題の検討、検査機材の整備などの準備段階の取り組みの重要性が認識された。

### 【医療チームの活動・評価】

2013年11月10日にフィリピン政府より日本政府に対し医療チーム派遣の要請があり、即日日本政府の派遣決定が出た。JDRMTは派遣決定後48時間以内の日本からの出発を目標とし、11日15時、成田空港発マニラ行きチャーター機が確保できたため、10日20時45分に一斉に募集の連絡を入れ、締め切りは22時45分、24時までに選定結果を報告するという条件で募集を開始した。この募集に対して、10日は日曜日であったにもかかわらず、結果として20人程度の募集枠に対して4倍程度の応募があった。かなり緊急のメンバー募集であったにもかかわらず、多くの応募がありチーム形成上の困難は生じなかった。これは登録メンバーの「平時より災害があればいつでも出動できるよう準備する」という努力なくして実現できない。最終的に派遣決定から出発までの時間は21時間であり、最も短時間での派遣例の1つとなった。

JDRMTは個人の意思により登録したメンバーを中心として、活動に必要なチーム能力を形成するための研修や課題検討を行い、実際の被災地での活動で得た経験、教訓などを登録メンバーで常に振り返りを行い、新たな改善への努力として積み重ねてきた。今回は、初めての現地派遣参加のメンバーが1次隊から3次隊までの81人の隊員のうち6割を超える50人を占めたが、クリニックとしての運営・管理・隊員の健康管理なども含めて、チーム全体として大きな問題なく活動を完遂することができた。そのほか、患者への丁寧な対応、子供や女性への配慮、パブリックヘルスの啓発活動など、きめの細かい活動が実践できたと考えられる。これらの結果は、平時の研修・訓練などへの参加の成果であると考えられる。国際協力機構(JICA)の派遣オペレーションスタッフも同様で、20人の事務局スタッフのうち、実際の経験があったのは3人であった。事務局の機能についても平時の準備が成功要因となっている。

今回の派遣にあたっての最大の課題は25人余りの1次隊メンバーと約5tの機材を現地まで輸送する手段の確保であった。タクロバン市内では活動に必要な車両の確保が難しい状況にあったため、時間はかかっても車両の調達が可能な経路を選択せざるを得なかった。セブまで航空機で移動し、

車両を調達したうえでフェリーと陸路で現地まで行くルートが最適であると判断された。そこで日本チームはチームを 2 つに分け、1 つは先遣隊として空路でタクロバン入りをし、現地での活動拠点や宿営地の選定、被災地の状況確認を行った。残りのメンバーはセブで車両と食料などを調達したうえで海路 5 時間、陸路 170km で目的地のタクロバンに向かった。結果として先遣隊がタクロバン入りしたのは 12 日、残りのメンバーが到着したのは 14 日夕方、その直後よりテントの設営を行い、翌 15 日には海外からの医療チームとしては最も早いタイミングで、タクロバン市内にてクリニックを開始することができた。

海外からのチームの多くは、特に 1 次隊が活動した初期の段階ではタクロバン市内に集中したが、移動手段、検査機材、医薬品などの制約により、周辺地域に展開できるチームは少なかった。そのためヘルクマスター会議において、フィリピン保健省からタクロバン郊外の周辺集落への展開の要請があった。フィリピン保健省も周辺集落の医療ニーズについて、必ずしも十分な情報を把握しているわけではなかったため、保健省からの情報に加えて、JDRMT においても独自で対象となる集落の医療ニーズの調査も行いつつ、モバイル診療を行った。モバイル診療を実施した集落において、迅速評価（ラピッドアセスメント）を試験的に実施した。あらかじめ準備していたチェックリストに従って、集落の保健省スタッフやヘルスワーカーを対象にインタビューを辞しし、結果をフィリピン側に提出した。これにより、被災後の集落のパブリックヘルスの状況を把握することができ、被災地への医療を行ううえで有益な様々な情報を得ることができた。

今回、早期より台風ハイヤンへの警戒を強めていた国際人道問題調整事務所(United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs : UNOCHA)は台風上陸前に国連災害評価調整チーム(United Nations Disaster Assessment and Coordination : UNDAC) を現地に派遣したが、この UNDAC に日本からも 2 人が参加した。UNDAC チームは、他のチームに先立って現地入りし、被災状況の調査・把握・救援チームの出入りの確認と各チームへの情報提供などの任務を持ち、JDRMT も UNDAC チームに参加した日本人メンバーより情報提供や現地での宿舎の確保などの便宜供与を受けた。多くの支援チームが必ずしも十分な情報を持たないまま被災地に集まる中、このような UNDAC チームが果たした役割は大きかった。大規模災害発生後、多数の支援者が集まる被災地でのオペレーションは、決して一国、ましてや一国の 1 チーム単独で完結しうるものではなく、当該国と国際社会の協力、被災地に集まった支援チームを効果的に活用するための調整が必須であると認識された。今回、日本からも 2 人の UNDAC チームに参加したことは、国際協調の一端を担うとともに、JDRMT との連携の点でも有益であった。

## 【まとめ】

フィリピン台風ハイヤンの被災地での JDRMT の活動レビューを通じて、いかに平時の準備の各種取り組みが妥当であったかということを確認することができた。登録メンバーが中心となり、研修・訓練、課題検討などに取り組む現在の JDRMT の運営システムが、現場での質の高い活動につながっていることを示す事実が確認された。